



田原祭
本町の山車

本町山車修復記念誌

田原祭のあゆみ

城下町文化の粋を集めた豪華なからくり山車、町をゆるがす大煙火・御輿・夜山車など様々な行事の行われる田原祭も、永い変遷を経て今日の姿となってきました。

それぞれの時代に楽しみ受け継がれてきた田原祭も、現在の形は明治期に確立されましたが、ここに田原祭の歴史の概要を、田原町史や文化財保護審議会委員 関目作司氏の資料などを参考にさせて頂き、振り返ってみたいと思います。

田原祭は、徳川中期までは熊野神社一社の祭礼でありましたが、約二四〇年前の宝暦三年（一七五三年）より熊野神社、神明社、八幡社の三社祭といわれるようになり、明治初年まで続きました。

祭の行事は、祭礼踊りが盛んに行われ、踊りから次第に歌舞伎芝居、神楽芝居が奉納されるようになり、名人も多く現れ、殿様も見学に来たことが記録に残されております。

宝暦七年（一七五七年）城の日記

「萬留帳」八月六日のところに、本町・上り町・横町・中町申し合わせて合同で藩の浅黄無紋の横幕・天幕を借用して車を仕立てたとあります。これが田原の「山車」の始めであると
言われております。

嘉永二年（一八四九年）八月、本町で「傘鉦幕」を新調しており、現物が田原町民俗資料館に保管されております。

それを見ると前後は縦横約一間、奥行一間半の黒打房の赤い幕であり、仕立てた傘鉦山車の大きさがしのべれます。

傘鉦は、かさの上に鉦を建て神の寄代としたもので、「昇き山」と「曳き山」の二種類あったと言われております。

傘鉦を仕立て、祭礼踊をしながら楽しんだ三社祭、またの名を傘鉦祭とも言われ明治初年まで続いてきました。

明治十年（一八七七年）巴江神社が社殿を改築する頃まで、三社祭の幟が建てられたと言われ、それ以後は神明社・八幡社の祭を田原祭と言われるようになりました。

熊野社は昭和三十五年巴江神社に合祀されるまで、毎年旧八月十五日に祭礼が行われました。巴江神社は十月二十三日の兒島高德の命日が祭礼の日であったが



「萬留帳」

ごあいさつ

田原町長 柴田芳三

田原本町の山車の修復完工に当たり、一言お祝いを申し上げます。

近年、目まぐるしく変化する社会情勢の中、田原町には古来から大きなイベントとして、田原祭という豪華絢爛たる伝統文化行事が、今日も変わらず町民に愛され受け継がれております。

中でも萱町・本町・新町の三町には、祭りの主役ともいべき山車があり、各地区それぞれに特徴のある華やかで精巧なからくり人形が、祭りの賑わいと熱気をさらに盛り上げております。

さて、田原町の有形民俗文化財として指定されている本町の山車は、三町で二番目に古く、明治二十九年に新調され、九十七年という長い年月を経ており、山車も人形も相当に傷んでいたところであります。

老朽化の中、この度皆様方の熱意と御努力が実を結び、全面修復というかくも立派に完工をみましたことは、誠に慶喜にたえないところでございます。

終わりに、先人達の数々の思い出を刻んできた田原祭からからくり人形の山車が、田原町の伝統文化として今後とも末長く後世に伝承されることを念願するとともに、今回、修復のために御尽力いただいた本町自治会長さんをはじめ関係者の皆様方に、心から敬意と感謝を申し上げます。お祝の言葉と致します。

ごあいさつ

田原町議会議長 真木健治

本町山車修復記念誌の発刊を心からお祝い申し上げます。

本町の昼山車は、明治二十九年に新調されて以来、はや一世紀近くの歳月を経て老朽化しておりましたところ、自治会の皆さんの修復に寄せる熱い期待と自治会長さん始め役員の方々の並々ならぬご努力により、ここに立派に修復が成りましたことを心からお喜び申し上げます。

祭りは、その土地の歴史と風土から生まれ、先人の暮しの中で育まれた、かけがえない文化遺産であります。

このたび修復されました昼山車と人形は、昭和六十三年七月に萱町、新町のもの合せて三台が田原町の有形民俗文化財として指定を受けており、後世へ継承していく貴重な文化財となっております。

先人の熱い心意気と思入れが伝わる豪華な山車、からくり人形の巧妙な動き、笛・太鼓・鼓など華やかな道囃子の響き、山車に集まる人々のさざめきと田原の祭りはいやが上にも郷愁とロマンをかき立ててくれます。

歓喜、躍動、ふれあいと連帯を培う田原の祭りが、飛躍、発展する田原の源として末永く継承され、さらに充実発展することを念願し、修復のためにご尽力された関係の皆様にご敬意と感謝を申し上げます。ごあいさつといたします。

戦後の昭和三十四年頃から神明社・八幡社の祭礼と合わせ、九月に行われるようになりました。

明治に入り城主と共にあつた祭も一変しました。

従来の傘鉾に替り、祭の主体である昼山車を、名古屋で発展したからくり人形と共に、城下町文化を表す本格的な山車に切り替え、また明治二十七、八年頃にはもう一つの祭の主役である手筒煙火が、

田原で行われるようになりました。

華やかな祭、心意気をしめす田原祭へと、明治の人々は各町内への思い入れと共に行事を組立て、山車を作りました。

萱町が明治十三年に、本町が明治二十九年に新調し、新町が明治三十四年に購入し（後に昭和三年に再替）、ここに華麗な名古屋型からくり山車が、田原の地に誕生しました。

毎年九月十五日は昼山車を中心に、御輿・道囃・夜山車など賑やかに行われ、十六日は昼山車が済むと一転勇壮で豪華な煙火の祭となりました。

昭和六十三年、三台のからくり山車が田原町有形民俗文化財として指定され、田原祭も城下町田原を代表する伝統文化行事として、また今日でも最大のイベントとして行われています。

（白井孝市 記）

「傘鉾幕」箱書



本町の山車の由来について

寛永七年（一六三〇）に名古屋の七間町（今の丸の内地区）が能人形を飾った山車の『第一号』を曳き出した、これが山車機巧作りの口火となった。もちろん山車とは言っても大八車の上に人形を乗せただけの物だったらしいが、之に刺激された近隣の町内が競って山車を出すようになり、段々と趣向の凝ったものへと進んで行ったと記録に残されている。このうち山車の上に京の五条橋の模型を乗せ大薙刀の弁慶と牛若丸が渡り合うからくりで評判だった橋弁慶車は大八車で山車行例の先鞭をつけた七間町のものである。それから長い年月、名古屋の町人の祭りに対する愛情が次第に豪華で精巧な機巧人形山車が育って行ったのであろう。

この豪華な山車を我らが町、田原にもと、当時の本町の世話人たちが大変な努力と苦勞をして、名古屋の一流職人を総動員して、作らせたもので、お祭り棟九郎と、その技をうたわれていた山車職人



模型
若丸
会場に展示

明治廿九年九月二十三日
山車新調費明細取調
福沢三三
小計金三百七十四圓

| | |
|---------------|-------------|
| 明治廿九年九月二十三日 | 山車新調費明細取調 |
| 名古屋南外堀町二丁目 | 本林棟九郎 |
| 金貳百九拾貳圓也 | 山車志願代價 |
| 金拾貳圓也 | 塗物容器拾貳圓代 |
| 金貳圓也 | 手ヤウチン釣金具四十本 |
| 小計金三百七十四圓 | |
| 名古屋南外堀町二丁目 | 森 棟九郎 |
| 呉服商大丸三丁目下村正太郎 | 山車志願代價 |
| 手代 | 塗物容器拾貳圓代 |
| 多七 | 手ヤウチン釣金具四十本 |
| 梅吉 | |
| 幕四張表ウラ代仕立賃共 | |
| 水引三方ウラ代及仕立代共 | |
| 幕フサ四組代 | |
| 法被及綱分衣裳賃 | |
| 小計金三百八十八拾七錢七厘 | |
| 名古屋市宮町壹丁目 | 佐藤 理七 |
| 縫師 | 水引三方表縫料 |
| 名古屋市小田原町 | 松川屋弥三郎 |
| 塗物屋 | |
| 小計金三百七十四圓 | |

明治廿九年九月二十三日
山車新調費明細取調
福沢三三
扣

| | |
|---------------|-------------|
| 明治廿九年九月二十三日 | 山車新調費明細取調 |
| 名古屋南外堀町二丁目 | 森 棟九郎 |
| 金貳百九拾貳圓也 | 山車志願代價 |
| 金拾貳圓也 | 塗物容器拾貳圓代 |
| 金貳圓也 | 手ヤウチン釣金具四十本 |
| 小計金三百七十四圓 | |
| 名古屋南外堀町二丁目 | 森 棟九郎 |
| 呉服商大丸三丁目下村正太郎 | 山車志願代價 |
| 手代 | 塗物容器拾貳圓代 |
| 多七 | 手ヤウチン釣金具四十本 |
| 梅吉 | |
| 幕四張表ウラ代仕立賃共 | |
| 水引三方ウラ代及仕立代共 | |
| 幕フサ四組代 | |
| 法被及綱分衣裳賃 | |
| 小計金三百八十八拾七錢七厘 | |
| 名古屋市宮町壹丁目 | 佐藤 理七 |
| 縫師 | 水引三方表縫料 |
| 名古屋市小田原町 | 松川屋弥三郎 |
| 塗物屋 | |
| 小計金三百七十四圓 | |

動員して、作らせたもので、お祭り棟九郎と、その技をうたわれていた山車職人、



七間町、橋弁慶の機巧の模型
右方の人形は当時の弁慶、牛若丸
(1989年・世界デザイン博覧会名古屋会場に展示)

森棟九郎が山車を作り、からくり人形は門前町万松寺、玉谷(屋)正芳、すなわち、六代目玉屋庄兵衛の作であった。さらに水引幕の刺繍は五雲斎と雅号をもつ刺繍職人が、大幕などの飾り物は後の京都大丸の前身に当たる本町の丸に作らせている。たいした贅沢さだ。当時としては、最高の物であろう。その総経費は明治中期の金で一千九百三十八錢九厘であった。(山車の起源「人形からくり」『機巧人形の世界』の七代目玉屋庄兵衛氏の文より一部抜粋)
本町山車の唯一の古文書である福沢三三氏の『山車新調費明細調』(明治廿九年九月廿三日)に職人の名前、経費など

屋七郎七郎

名古屋市車町
西脇喜三郎
山車志願全部金物
幕水引金物代価
小計金九拾四也

名古屋市車町
西脇喜三郎
山車志願全部金物
幕水引金物代価
小計金九拾四也

名古屋市住吉町
簞屋新七
山車志願全部金物
幕水引金物代価
小計金九拾四也

名古屋市裏門前町万松寺門前
玉谷正芳
人形三個代価
物台彩色料
人形入長持志願代
人形衣裳大丸藤市私
右衣裳仕立賃並に人形小道具代
小計金七拾九圓四錢八厘

名古屋市西万町壺丁目
提灯屋
龜屋幸七
柱チャウチン六十二張代
油障子油引日当
張出し障子帳代
小計金拾壹圓式十六錢

一金八拾七圓五十錢

名古屋市車町
西脇喜三郎
山車志願全部金物
幕水引金物代価
小計金九拾四也

名古屋市住吉町
簞屋新七
山車志願全部金物
幕水引金物代価
小計金九拾四也

名古屋市裏門前町万松寺門前
玉谷正芳
人形三個代価
物台彩色料
人形入長持志願代
人形衣裳大丸藤市私
右衣裳仕立賃並に人形小道具代
小計金七拾九圓四錢八厘

名古屋市西万町壺丁目
提灯屋
龜屋幸七
柱チャウチン六十二張代
油障子油引日当
張出し障子帳代
小計金拾壹圓式十六錢

明細に記載されている。尚、山車輸送にも心を配り海路を取らず危険の少ない陸路を運んだと古老から聞いたことがある。

山車（作者＝森棟九郎）は総松造で完全な名古屋系の山車で二層唐破風屋形四輪（外輪）輪がけて覆い、天井は金箔押し合天井、庇、柱、勾欄は黒漆塗りに飾り金具を付け、上山（大將座又は人形舞台）の勾欄の中に有る彫刻も前面の波は川波を表現するため蜻蛉を波間に配し、両側面と後面には緑の地に草花を配し川堤を表現し、水引幕も急流の岩に碎け波打つ川面に鮎の踊る図で有り。『機巧圖彙』（寛政八年、細川頼直半蔵著、全三卷）下巻に記載されている『魚釣人形』の鮎を釣ったと言われる、肥前國（佐賀県）松前川の情景を良くまとめられ名古屋系の山車としては最高の傑作であろう。尚、大幕の金具類も本町の雪輪を形どり、本町の山車として完全な物を残された、当時の人々の努力と苦労に対し深く感謝している。尚、今回大修復されたが購入当時の形態が良く保存されている。今まで山車の名称は不明とされていたが今回山車収納庫の柱に銘板が発見され明治二十九年新調時より『神功皇后車』の名称がつけられていた。

| | |
|------|------|
| 山車代金 | 山車代金 |
| 八四三二 | 八四三二 |
| 三十五 | 三十五 |
| 四十五 | 四十五 |
| 四 | 四 |
| 三 | 三 |
| 二 | 二 |

| | |
|------|------|
| 山車代金 | 山車代金 |
| 八四三二 | 八四三二 |
| 三十五 | 三十五 |
| 四十五 | 四十五 |
| 四 | 四 |
| 三 | 三 |
| 二 | 二 |

| | |
|---------|---------|
| 祝儀及旅費日当 | 祝儀及旅費日当 |
| 五 | 五 |
| 四十五 | 四十五 |
| 七十 | 七十 |
| 四十 | 四十 |
| 三十 | 三十 |

| | |
|------|------|
| 荷造費用 | 荷造費用 |
| 三十八 | 三十八 |
| 五 | 五 |
| 六十二 | 六十二 |
| 四 | 四 |
| 八 | 八 |

| | |
|------------|------------|
| 名古屋市伝馬町三丁目 | 名古屋市伝馬町三丁目 |
| 糸屋 千代吉 | 糸屋 千代吉 |
| 芋綱代 | 芋綱代 |
| 中野屋 宗七 | 中野屋 宗七 |
| 太鼓 式 | 太鼓 式 |
| 小づつみ 三 | 小づつみ 三 |
| 大笛 三 | 大笛 三 |
| 小笛 二 | 小笛 二 |

| | |
|-------|-------|
| 山地車代金 | 山地車代金 |
| 八四三二 | 八四三二 |
| 三十五 | 三十五 |
| 四十五 | 四十五 |
| 四 | 四 |
| 三 | 三 |
| 二 | 二 |

| | |
|---------|---------|
| 祝儀及旅費日当 | 祝儀及旅費日当 |
| 五 | 五 |
| 四十五 | 四十五 |
| 七十 | 七十 |
| 四十 | 四十 |
| 三十 | 三十 |

| | |
|------|------|
| 荷造費用 | 荷造費用 |
| 三十八 | 三十八 |
| 五 | 五 |
| 六十二 | 六十二 |
| 四 | 四 |
| 八 | 八 |

値段史表

週刊朝日編 値段史年表(明治、昭和)より抜粋。(昭和63年6月30日初版)

| 品目 | 明治25~35年 | 昭和62年 | 倍率 | 品目 | 明治25~35年 | 昭和62年 | 倍率 |
|------------|----------|-------------|----------|-----------|-------------|----------|----------|
| 白米(10キロ) | 1円12銭 | 3,780円 | 3,375.0 | 小学校教員の初任給 | 8円 | 121,784円 | 15,223.0 |
| 味噌(1キロ) | 7銭 | 331円 | 4,728.5 | 東京大学の授業料 | 25円 | 250,000円 | 12,000.0 |
| 天どん | 5銭 | 800円 | 16,000.0 | 新聞購読料 | 28銭 | 2,800円 | 10,000.0 |
| 日本酒(上等) | 21銭 | (特級) 2,720円 | 12,952.0 | 大工手間賃 | 54銭 | 13,728円 | 25,422.0 |
| ビール | 14銭 | 370円 | 2,643.0 | 畳表の裏返し手間賃 | 10銭 | 3,500円 | 35,000.0 |
| 牛乳 | 3~4銭 | 70円 | 2,000.0 | 入浴料(銭湯) | 2銭 | 270円 | 13,500.0 |
| 郵便料金(封書) | 3銭 | 60円 | 2,000.0 | 芸者の玉代 | 25銭 | 3,500円 | 14,000.0 |
| 郵便料金(はがき) | 1銭5厘 | 40円 | 2,667.0 | | | | |
| 電報料金(15字迄) | 10銭 | (25字迄) 300円 | 3,000.0 | 本町山車新調費 | 1,019円38銭9厘 | ??? | |

山車、機巧人形及び付属品共、昭和六十三年七月一日に田原町の有形民俗文化財第二号の指定を受けている。

(鈴木敏文 記)

の名称がつけられていた。

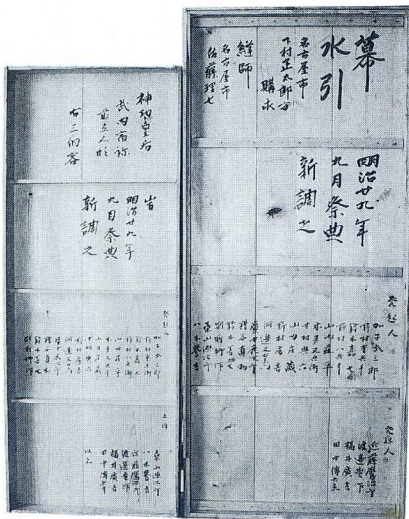
結びあがり図



文箱(ふばこ)や御簾(みす)の飾りに用いたりする。山車では前山の御簾と大幕(緋幕)の四隅に用いられている。

房飾りの結び方

| 房飾りの結び方 | 房飾りの結び方 |
|---------|---------|
| 一 尾三回五折 | 勢不入鳥子返 |
| 二 尾四折七折 | 借入金利子 |
| 三 尾五折 | 伴寿作へ筆料 |
| 四 尾六折 | 雑費子算 |
| 五 尾七折 | |
| 六 尾八折 | |
| 七 尾九折 | |
| 八 尾十折 | |
| 九 尾十一折 | |
| 十 尾十二折 | |



水引幕の収納箱



神功皇后車の銘板

◎明治十九年山車新調惣額
◎金壹千拾九円三拾八銭九厘

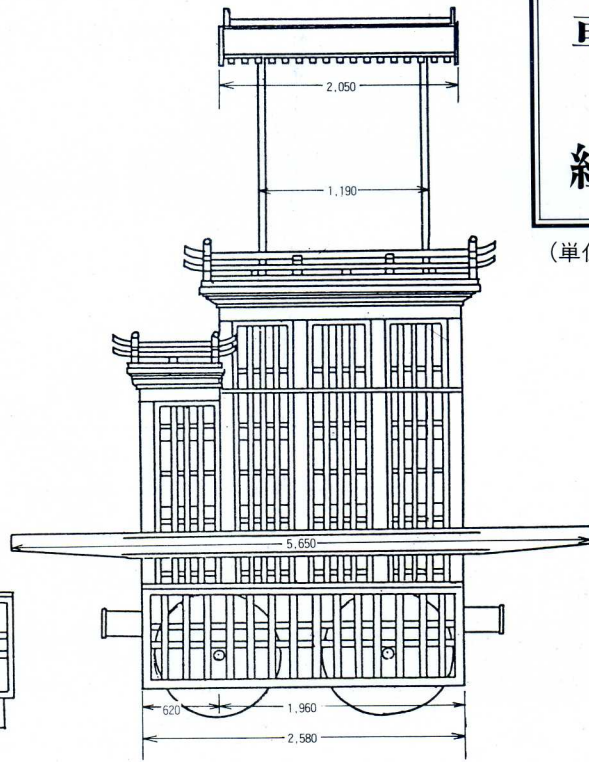
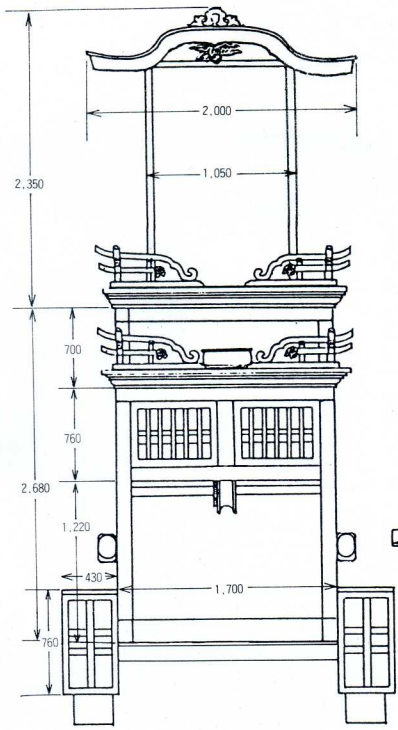
- 金五十四円八十一銭六厘
- 金四十八銭七厘
- 金五十銭
- 金八円

- 雑之部
- 金六円也
- 金三四六十銭
- 金壹円也
- 金五円也
- 金五十四銭九厘
- 金五四八十銭
- 金三四廿四銭七厘
- 金七円五十一銭
- 金五十四円五十六銭三厘

- 田中吉平運賃
- 松安へ礼及車賃
- 野村へ謝礼
- 六花連補助
- 河合善兵衛実費
- 名古屋へ宿泊
- 大工日当及人夫賃
- 雑品店払
- 雑費

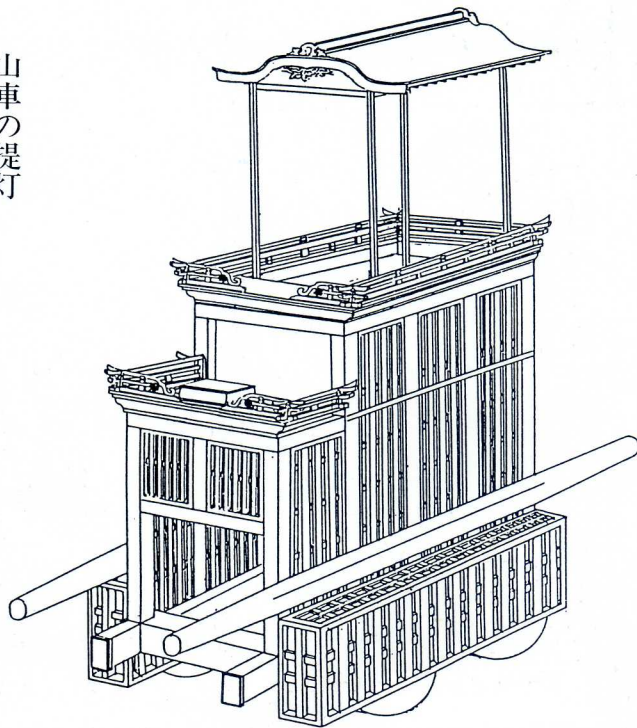
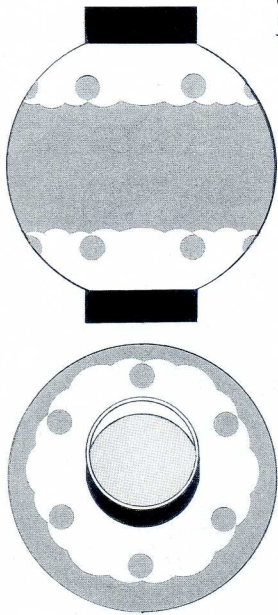
山車組

(単位:mm)



山車の提灯

購入当時の提灯は赤色に上下に雪輪を白抜きした図柄であったが、何時の間にか今の様な図柄(夜山車)のものに変わって行ったと思われる。提灯の張替の時には幻の提灯としない様是非復元したいと思えます。



からくり人形の由来

『日本書紀』によると神功皇后が武内宿禰と協力して新羅(三韓)新羅、百濟、高句麗)を討伐したとあり、これをもとにした一項が『機巧圖彙』(寛政八年、細川頼直半蔵著 全三卷)の下巻の中に『魚釣り人形』なる一文がある。

人形そろそろと淵へ釣を垂れ入れ暫有りて釣竿をずっと上げれば、魚釣に喰い付き上がる也。此凶する所は神功皇后、肥前国松浦川(佐賀県)にて鮎をつり給ふ所なり。伝(前出日本書紀)にいわく皇后三韓退治の御志有之、針をまげて釣とし飯を餌として石の上に登り、誓つていわく我三韓を退治すべくは魚此釣を飲めとて、水に入れ給えば鮎を得給ふ(以下略)。

六代目玉屋庄兵衛はこれを参考にして制作されたのではあるまいか。

山車、中段前方に手勾欄をつけた前山の前人形(采振人形)は一般に唐人人形が多いが本町のは袴姿で手には、扇子を持つ男装の童女で目、口に細工が有り、

返り目が出来ると共に舌を出すユニークな人形で他に余り例を見ない純日本風の前立人形で有る。

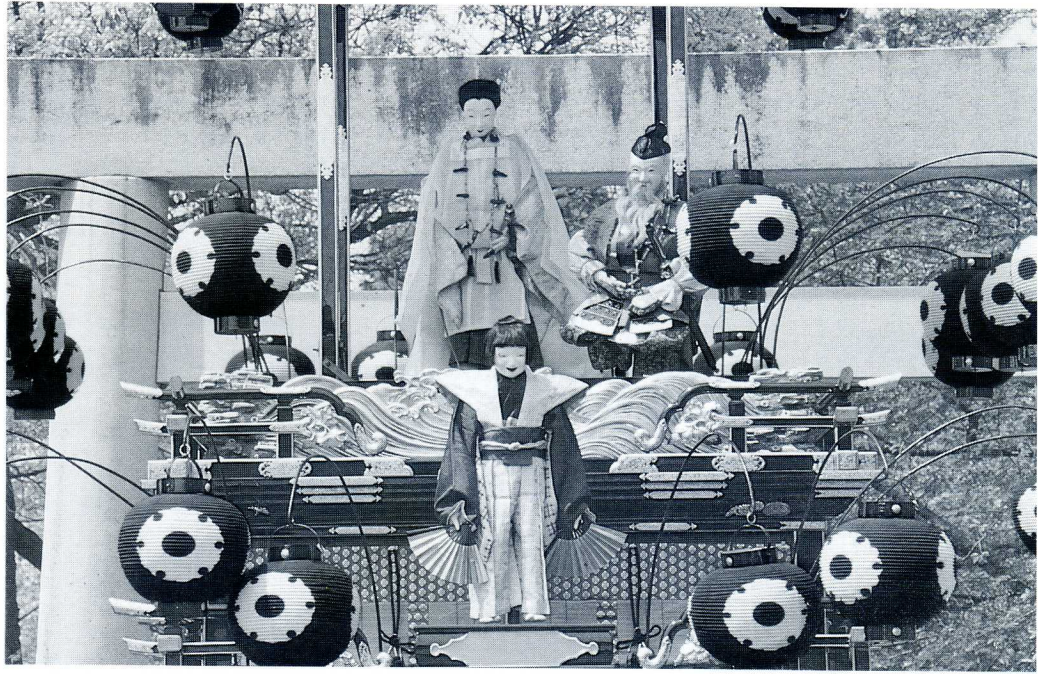
魚釣り人形

人形そろそろと淵へ釣を垂れ入れ暫有りて釣竿をずっと上げれば、魚釣に喰い付き上がる也。此凶する所は神功皇后、肥前国松浦川(佐賀県)にて鮎をつり給ふ所なり。伝(前出日本書紀)にいわく皇后三韓退治の御志有之、針をまげて釣とし飯を餌として石の上に登り、誓つていわく我三韓を退治すべくは魚此釣を飲めとて、水に入れ給えば鮎を得給ふ(以下略)。



昭和四十五年頃人形三体の頭(顔)の胡粉塗替修復及び繰り糸の新調取替(七代目玉屋庄兵衛氏に依頼)昭和四十年代終り頃人形三体の装束の新調。平成三年神功皇后の水干を新調、武内宿禰の鎧の復元、前立人形の首の修理をおこなった(八代目玉屋庄兵衛氏に依頼)。

「機巧圖彙」下巻の魚釣り人形の図



参 考 資 料

からくり人形 『糸からくり』

作者三体共 六代目玉屋庄兵衛

神功皇后 頭は胡粉(白) 艶出し、

眼はギヤマン、描き肩、口

頭髪はしやぐま、

装束は巫女姿(白衣緋袴)

に水干を着用し勾玉の首飾

りをつけている。昔は金襴

の衣服に袴姿であった『田

原町民俗資料館に保存され

ている』

武内宿禰 頭は胡粉(黄土色) 艶出し

眼はギヤマン、眉髻は植毛

頭髪はしやぐま、

装束は金襴の鎧直垂姿であ

る。

前立童女 頭は胡粉(白) 艶出し、

描き肩、眼、口(返り目、

舌出しの細工あり)

装束は袴姿で両手に扇子を

もっている。

しやぐま Yakの尾の毛、縮れ毛でつ

くった入れ毛(かもじ)

(註) Yak(Y a K)北インド、チベットな

ど高地に住む動物、形は牛に似て強

大、角があり、茶色の長い毛を生じ、

尾は馬の尾に似る(広辞苑)

(鈴木敏文 田中健治 記)

人形の所作

神功皇后の「鮎釣り」の所作は「初出

羽」「神舞」「大辺志見」の囃子に合わ

せて鮎を釣り上げて悦ぶ様子を演じます。

祭礼の十五日・十六日、町内六・七ヶ

所で山車を停めて披露し、三町の山車が

十五日は八幡社、十六日は神明社の神前

に勢揃いしたところで奉納を行い、その

日の舞納めとなります。

操作は神功皇后の胴と両手を一人、足

と頭を一人、武内宿禰を一人が分担して

行います。

所作は先ず、ピー・ピーの笛の合図と

ヨイの掛声で始まります。

「初出羽」

神功皇后がゆつくりと野原の

風景を眺めながら川原へ向かい

ます。

「神舞」

手をかざして周囲を見渡し、

竿を振り上げ川面へ糸を投げ入

れます。

「大辺志見」

勢いよく鮎を釣り上げて武内

大、角があり、茶色の長い毛
尾は馬の尾に似る(広辞苑)

(鈴木敏文 田中健治)

宿禰と小踊りして悦び、前後・左右の見
物人に見せて廻り竿を納めて終わります。
(所要時間は概ね三分三十秒)

前立人形は山車が巡行中はたえず囃子
に合わせ、時にはゆっくりと、時には早
くはげしく、手足を上げ、首を振り、体
を左右に動かし華やかに景気づけをしま
す。

時折り舌を出し、返り目をして
見せながら祭り気分を盛り上げて
す。

神功皇后の「鮎釣り」の所作中
して休みます。

(田中健治)

神功皇后



武内宿禰



本町の囃子について

村の鎮守の神様の

今日はお祭り日

ドンドンヒヤララ ドンヒヤララ

ドンドンヒヤララ ドンヒヤララ

朝から聞こえる笛太鼓

この古い唱歌に歌われた「笛・太鼓」

は、神社や山車で演奏される囃子を指すのだろう。山車囃子は沢山の人々が、綱を引き、又梶取りの人々が重い山車を一気に持ち上げる為の志気を鼓舞したり、からくり人形の奉納芸をリードするのに必要で、重大な役目をもっている。

からくり人形も、ある時はゆるやかに、ある時は速く激しく演奏される囃子に誘導されて動きが滑らかになり、表情動作が生き生きと輝いてくる。

本町の囃子も、明治二十九年に昼山車が新調されたのを機会に、当時の若衆であった野村重兵衛・福沢三三・河合虎三郎・白井瀧蔵氏等が中心となって名古屋から指導者を招き、當行寺において約一ヶ月間、猛練習を積み覚えた囃子が今日まで伝承されてきたのである。山車囃子

は各山車によってすべて曲が違い、からくり演技等に合ったものが演奏される。

本町の山車囃子には、

①道行き（目的地への行き帰り）四能、

三番叟、獅子、下り羽、五条橋（七

間町）、田原ばやし

②曲場、どんてん（方向を変える）車

切り

③人形の演技（能楽からとった曲で、

からくり人形を踊らせる）初出羽、

神舞、大辺志見

三番叟、車切り、初出羽、神舞、大

辺志見には笛の中でも、能管が使用される。能管は力強く深みのある音色が特徴的で、少し高度な技術を必要とされる。

四能、獅子、五条橋、下り羽、田原ば

やしは篠笛（竹笛）が使用され、繊細な哀感があり大変吹き易い。現在では下り羽、田原ばやしの曲は伝承者が無い為演奏されていない。

囃子には笛の他に、大太鼓一、小太鼓

二、鼓三が演奏に加わっている。昼山車に乗る囃子方は十三名から十五名位で、

笛のメンバーが多い時は山車の後から徒歩で付いて行くことがある。

私が囃子方として仲間入りしたのは昭和二十四年頃で、その当時は本町会館で約一ヶ月間、毎夜練習に励んだものである。笛方は青竹を笛の寸法に切ったものを使い、大太鼓、小太鼓方は自分の両膝を、鼓方は左肘を叩いて先輩の調子に合わせ練習したものです。後で袖やズボンをまくって肌の赤くなっていない者はきつく注意されました。今の様に扇風機のない当時は、若い手のすいた者は先輩のうしろから団扇で風を送って暑さをやわらげる役目もしました。見習い中はアグラをかいたりタバコを喫ったりすることは許されませんでした。

夜山車の囃子は主に、五条橋の曲が道行として演奏されています。私の若い頃には一時ノーエ節を演奏したこともありましたが、最近あまり聞かれなくなりました。

明治、大正、昭和、平成と長い年月をかけて受け継がれてきた伝統ある囃子を、これからも次の世代の方々に伝え末長く守って行きたいと念じています。

（森下省三 記）

ヶ月間、猛練習を積み覚えた囃子が今日まで伝承されてきたのである。山車囃子

二、鼓三が演奏に加わっている。登山車に乗る囃子方は十三名から十五名位で、

懐かしい昔の祭のエピソード

○ 六花連に入り、登山車の囃子方として笛を担当する様先輩に言われたが、当時の練習風景は、先輩の後に正座し指だけ動かす動作しかさせてもらえず、笛には決してさわらせてもらえなかった。

○ 楽器にはさわらせてもらえず、大太鼓・鼓の場合、自分の膝を手でたたいて調子をとる練習をした。

○ 登山車購入の際、名古屋から師匠を招へいし、約一か月程泊り込みで囃子の練習をしたものだ。長老からよく聞かされた。

○ 当時の笛の先生は、「トラさん」といわれ、非常に厳しい人であった。

囃子方の練習の時は、先輩格の師匠の後で、暑い夏のことゆえ団扇で師匠をあおいだものだった。

煙草などは、練習中は決して吸わせてもらえなかった。

担当する楽器は、自分がやりたいものをするのではなく、目上の先輩が決めたのでやりたい楽器があっても出来なかった。

○ 本町独自の踊りとして、芸者から教わったのが「お若い衆」「タコガニュー」。当時の雪輪組（消防団員）は煙火のみで三十五歳まで。

のんき連は、消防を抜けた者で構成され、現在の厄年主体となったのは消防団の合併の頃だったと思う。

この当時に大筒に乗せてもらうには、いくらかの金を積んで組に支払うのが慣例。女房と喧嘩となり、あわや夫婦別れ寸前までいった。

○ 当時の本町の構成は、

六花連は御輿と夜山車のみに専念し、煙火は雪輪組、道囃子はのんき連。

○ 御輿の担ぎ方の練習があり、背の順に並ばされて、声の出し方・足の運び方を教えられ、練習は本町会館の二階だった。

六花連時代は、お囃子の練習↓踊りの練習↓寄付まわり↓置き屋通いの

お決まりのパターンだった。特に置き屋通いは、夜山車にいい芸者に乗って踊ってもらうため、他町の若い衆と芸者の奪い合いとなるほど盛んだった。

○ お祭りが近づくと、若い衆と芸者の心中事件がよくあった。なかには、火を付ける輩もいた。

芸者通いは、三十日間ほど、しかも朝帰りかほとんど。

○ 当時は、国道二五九号で市が開かれていた。芸者の置き屋は、国道の南側に何軒もあり、置き屋から朝帰りのとき、浴衣がけのため恥ずかしくて、国道を渡るのがためらわれた。



夜山風景

戦時中は、祭もはてには行えなかった
ので夜山車も出ず、當行寺の境内で相撲
をとったりしたもので寂しいものであつ
たが、紀元二六〇〇年祭では昼山車、夜
山車が出された。

若い衆の中には、威勢のいい者もいて、
頭を剃ったり、蝶々結びをしたり、かつ
らをかぶり嫁さんの着物を着たりするほ
ど。

夜山車の「生き人形」紀元二六〇〇年
のころ。

横田音次郎さん、森下界次さんらが『湊
川の別れ』の楠正成らに扮して、針金で
腕を吊って夜山車が町内をまわる間中ず
っと乗っていた。

夜山車での喧嘩は、ひんばんにあった
が中央分団が結成されてからは減った。

手筒は、当時自分たちで火薬をつめ、
「ひいち池」で出した。

場所は、ひいち池↓神明社、打上煙火
は今の④駐車場↓参天池下↓晩田と変遷
した。

手筒火花を「ひいち池」でだしていた
時に、最後のはねが浜田さんに当たり全
身火傷をした。このことがきっかけで野
村重兵衛氏により中止させられた。

七・八年たった頃、火花の寄付に野村

重兵衛氏のところへいった時に、「火花
などんでもない」と猛反対され、和田
屋さんに寄付の依頼をしたが野村さんが
反対しているのに寄付をするわけにはい
かない、と断られたために野村さんと和
田屋さんの間をどれだけ往復したことか。
○ 昼山車の梶取りでは、道路が（現在と
比較して）非常に狭かったので難儀をし
た。特に、上町の角付近では浪花屋さん
の店先に突っ込んだり、看板に傷をつけ
たりして、苦情の絶え間がなかった。

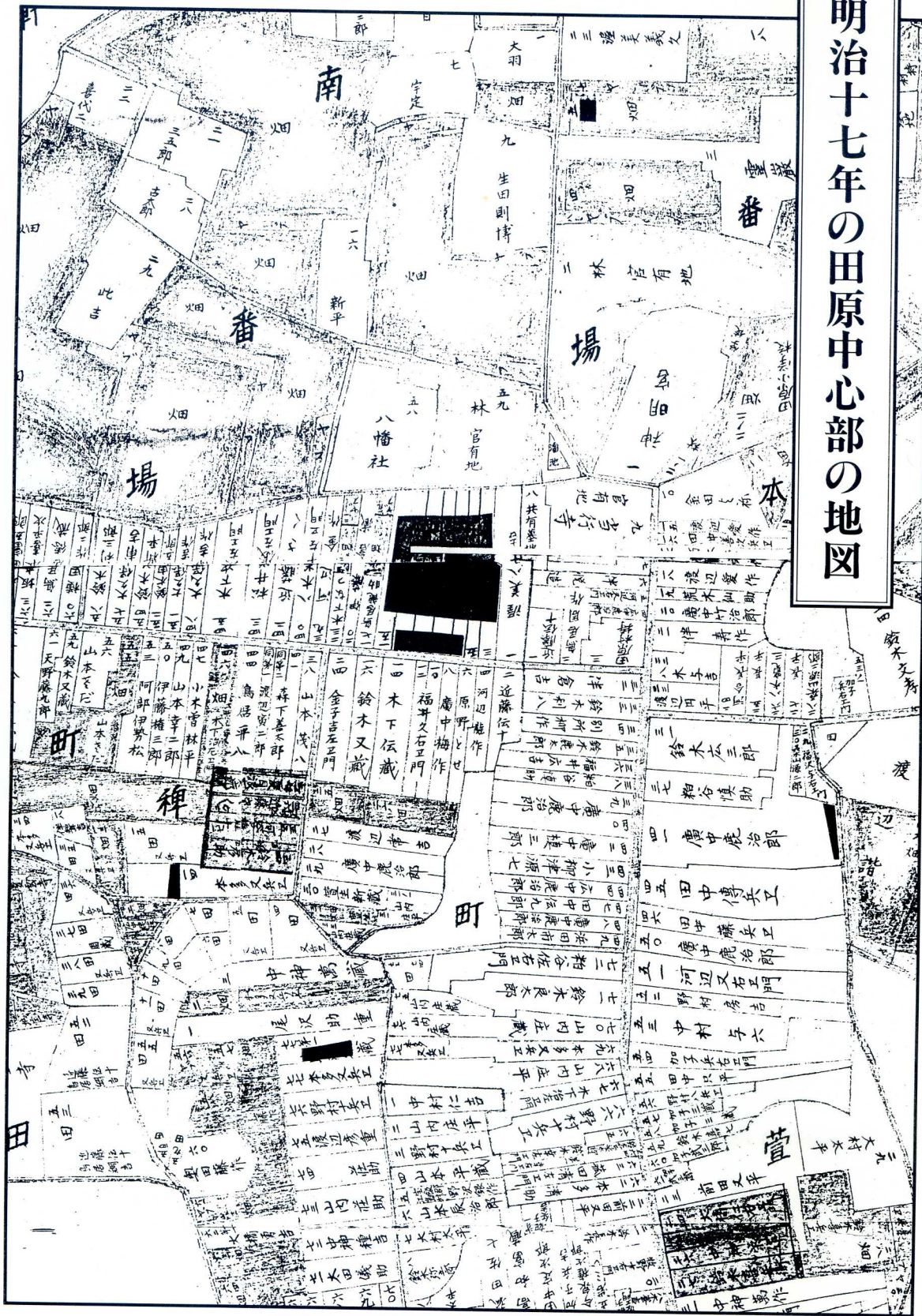
平成四年九月二十七日
座談会出席メンバー

林 茂男
加藤 明
山内 昌彦
富田 秋成
横田 章
松井 克雄
高橋 則雄
編集委員一同
(鈴木一三・石川厚記)



夜山車の生き人形

明治十七年の田原中心部の地図



木重兵衛氏により中止せられた
七・八年たった頃、花火の寄付に野村

山車修復事業経過報告

平成三年 九月二十六日 役員会

本年九月十五日の祭典時において破損した山車
屋根の修復及び付随計画について審議。

へ計画概要

- * 飾り金具 専門家に鑑定依頼
現状のままで修復
 - * 屋根 専門家に鑑定依頼し、全面修復
 - * うるし 「本町」の名入り八個
その他二十前後
 - * 提灯 うるし塗装、金具(鉄製)塗装、
ひのき作り
 - * 車輪保護枠 障子の取付金具の修理
 - * 幕の取替 水引幕・大幕
 - * 引き綱の取替 赤・黒・白の三色の藁のロープ
 - * 屋根のせりあげ用ロープ 麻
 - * 油圧ジャッキ
 - * 山車の屋根の雨避け
 - * 欄干の欠陥部品
- 十月 九月 評議員会
山車修復の概算見積金額を提示し、評議員の意
見聴聞。
- 十月十七日 山車の検証
十月 八月 役員会
修復事業予算に関する審議。龍村美術織物より
水引幕等の見積を提出。
- 十一月十二日 評議員会
事業予算について討論。町及び区の補助金・町
内各戸月掛け六カ月分の負担金・篤志寄付・本
町自治会特別基金にて充当することに決定。

平成四年

一月十七日 役員会

寄付金について集金時期等を審議。

二月 三日 役員会

山車の装飾部分の解体等を審議。

二月 九日 山車装飾部分解体

専門業者に修復依頼。

八月 九日 「本町の山車」修復記念誌編集委員会発足

編集方針・内容構成・発行部数・出版時期等を討議。

八月二二日 編集委員会

八月二三日 山車装飾部分組立

うるし塗装等の装飾部分・引き綱等が完成した

ため、山車を組み立てる。水引幕・大幕は間に

合わないため、今年の祭典には従来の幕を使用

することとなった。

九月二七日 座談会

田原祭りに詳しい方々に集まっていただき、昔

の祭りの思い出話を語ってもらい、記念誌編集

の資料とする。

平成五年

二月 四日 編集委員にて京都出張

龍村美術織物訪問、水引幕等の検収を行う。

二月九・十一・十四日、三月十四・二一日 編集委員会

四月十二日 水引幕完成

龍村美術より水引幕等が届けられ山車に装飾。

四月十八日 新調の山車組立

五月十五日 編集委員会

五月十九日 水引幕・大幕の調整

龍村美術を招へいし、幕の調整を行う。

『**昼山車修復事業費概要**』

水引幕、大幕の新調 六〇〇万円

漆塗装、金箔押し仕上げ等 四六〇万円

屋根土台、車輪等修繕 二二〇万円

提灯、引き幕、ロープ・シート等 六〇万円

内各戸月掛け六カ月分の負担金・篤志寄付・本町自治会特別基金にて充当することに決定。

屋根土台、車輪等修繕
提灯、引き幕、ロープ・シート等

二二〇万円
六〇万円

編集後記

約一世紀の歳月を経て、今日まで引き継がれてきました本町昼山車を、この機会に、今一度見直そうと、この記念誌が企画されました。

昼山車の修復ぐらいで、記念誌発行までしなくても、という考えも片方にありましたが、現実には編集作業をしてみますと、この機会を逃さなくてよかったです、つくづく感じました。当時の記録や資料、そして、何よりもまして、両親・祖父母から語り継がれた昔の祭りの様子の記憶が、今まさに失われようとしていました。取材可能なタイムリミットのなかで、ささやかながら、集められる限りの資料・遺物・記録・参考文献を元に、史実に即した編集を心がけたつもりであります。なにせ素人ばかりのメンバーですので、至らないところが多々あるかと存じます。各項目ごとに分担をして起稿しましたので、文責を負うよう氏名を記載

しました。

娯楽のすくなかった当時の人々の『祭』への深い思い入れ、小さな町でありながら豪華絢爛な山車を奮発した旦那衆の心意気、祭りを守り育ててきた先人達の苦楽等々を、行間から汲み取っていただければ、編集者一同のなによりの喜びです。
(別所淳二記)

《参考文献》

- 萬留書 宝曆 三年
- ” 宝曆 七年
- 御祐筆部屋日記 文化十四年
- ” 文政 三年
- 御用人方日記 文政 五年
- 御用方手控日記 文政 六年
- 機巧人形の世界 七代目玉屋庄兵衛 中日新聞社発行
- 機巧圖彙 細川頼直半蔵 江戸科学古典叢書(恒和出版)
- からくり人形の宝庫 千田靖子 中日出版社
- からくり人形の文化論 高梨生馬 学芸書林

| | | | | | | | | | | | |
|---------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 本町山車修復委員 | 田中健治 | 岡本昭悟 | 加子宏 | 光部隆夫 | 田中忠雄 | 鳥井英豆 | 別所淳二 | 広中貴彦 | 鈴木一三 | 江守正吉 | 石川厚 |
| 本町山車修復記念誌編集委員 | 鈴木敏文 | 田中健治 | 岡本昭悟 | 森下省三 | 白井孝市 | 別所淳二 | 鈴木一三 | 石川厚 | | | |

本町の山車

本町山車修復記念誌

平成五年三月吉日
発行 本町自治会
編集 本町山車修復記念誌
編集委員会

